

「海軍大将」考

山口 宗之*

A Study of “Admirals”

Muneyuki YAMAGUCHI

Abstract

In a study of 38 officers promoted to the rank of admiral from among the 16-39th graduates of the Naval Academy, the following respects were made clear:

1. Four admirals did not graduate from the Naval Admiral Staff College;
2. A Naval Admiral Staff College record was regarded more highly than a Naval Academy record;
3. But, the Naval Academy records of a few admirals were mediocre;
4. Possession of the “Order of the Kinshi” medal and service as a foreign resident officer were not indispensable conditions for promotion to admiral.

はしがき

さきに筆者は陸軍将校養成制度が確立した士官学校（以下、「陸士」と略称）1期（明治23年7月卒業）から26期（大正3年5月卒業）に至る間陸軍大将に任じられた66名（ただし皇族を除き死後の進級者を含む）を対象に種々の視角から分析をこころみ

- ① 幼年学校の履歴および成績，士官学校の卒業成績は問題にならず
- ② 陸軍大学（以下、「陸大」と略称）入学の遅速も無

関係

- ③ 陸大優等卒業（恩賜）成績は45%でいどの効力をもったが切札でなく，中・下位の成績の者十数名存在
- ④ 陸大卒乃至これに準ずる学歴・資格を持たぬまま現役で進級した1例あり等の事実を指摘した¹⁾。

本論においてはこれに対応する期の海軍大将38名——すなわち海軍兵学校（以下、「海兵」と略称）16期（明治23年4月卒業）から39期（明治44年7月卒業）に至る——について共通する視点から考察を加えたいと思う。

I

氏 名	海 兵			海 大			将官序列	大 将 進 級 年 月 日	出 身	備 考
	期	人数	序列	期	人数	成績				
井 出 謙 治	16	29	2				1	大正13. 6. 11	静 岡	男爵
加 藤 寛 治	18	61	1				1	昭和2. 4. 1	福 井	
安保(沢野)清種	同	同	11				2	同	(佐賀) 鹿兒島	
百 武 三 郎	19	50	1	3	8		1	3. 4. 1	佐 賀	
谷 口 尚 真	同	同	5	同	同		2	同	広 島	男爵
山 本 英 輔	24	18	2	5	16		1	6. 4. 1	鹿兒島	
大 角 岑 生	同	同	3	同	同		2	同	愛 知	
山 梨 勝之進	25	32	2	5	同		1	7. 4. 1	宮 城	
小 林 躋 造	26	59	3	6	12	優等 (首席)	1	昭和8. 3. 30	広 島	

*教養部

平成9年9月2日受理

野村吉三郎	同	同	2				2	同	和歌山	
中村良三	27	113	1	8	12	優等 (首席)	1	9. 3. 30	青森	
末次信正	同	同	50	7	13		2	同	山口	
永野修身	28	105	2	8	12		1	同	高知	18. 6. 21 元帥
高橋三吉	29	125	5	10	10		1	11. 4. 1	東京	
藤田尚徳	同	同	15	同	同		2	同	東京	
米内光政	同	同	68	12	16		3	12. 4. 1	岩手	
百武源吾	30	187	1	11	12		1	同	佐賀	
加藤(船越)隆義	31	188	5	12	16		1	14. 4. 1	(東京) 広島	子爵
長谷川清	同	同	6	同	同		2	同	福井	
及川古志郎	同	同	76	13	17		3	14. 11. 15	岩手	
塩沢幸一	32	192	2	同	同		1	同	長野	
山本五十六	同	同	11	14	20		2	15. 11. 15	新潟	18. 4. 18 元帥
吉田善吾	同	同	12	13	17		3	同	佐賀	
嶋田繁太郎	同	同	27	同	同		4	同	東京	
豊田貞次郎	33	171	1	17	24	優等	1	16. 4. 4	和歌山	
豊田副武	同	同	26	15	20	同	2	16. 9. 18	大分	
古賀峰一	34	175	14	同	20		1	17. 8. 1	佐賀	19. 3. 31 元帥
近藤信竹	35	173	1	17	24		1	18. 4. 29	大阪	
高須四郎	同	同	141 ²⁾	同	同		2	19. 3. 1	茨城	
野村直邦	同	同	91 ³⁾	18	29	優等	3	同	鹿児島	
沢本頼雄	36	191	2	17	24		1	同	山口	
塚原二四三	同	同	20	18	29		2	20. 5. 15	山梨	
南雲忠一	同	同	7	同	同		4	(19. 7. 8)	山形	自決
井上成美	37	179	2	22	21		1	20. 5. 15	宮城	
遠藤喜一	39	148	7	21	22		3	(19. 5. 3)	東京	戦死
伊藤整一	同	同	15	同	同	優等	4	(20. 4. 7)	福岡	同
山県正郷	同	同	5	22	21		5	(20. 3. 17)	山口	同
高木武雄	同	同	17	23	22		6	(19. 7. 8)	福島	同

上表は大將進級の年月日順に作成したものである(戦死進級者を除く)。このうち海兵18・19・24・26・27・29・31・32・33・35・36の各期では複数以上で計27名。27期大正9年度までは同期同時進級であるが、29期以後半年乃至1年のずれが出てくる。また28期永野修身を初例として1期上の昇任時に同時進級した者——30期百武源吾・32期塩沢幸一・36期沢本頼雄・37期井上成美——5例あり、いずれも海兵卒業成績10番以内であることが注目される。

つぎに海軍大学卒業の資格を持たぬ者が4名——16期井出謙治・18期加藤寛治・同安保清種・26期野村吉三郎——いる。ただし海大出身者が出るのは17期以後であり18期加藤・安保のクラスに3名居るがいずれも中将どまり。26期では小林躋造を除くと海大卒10名のうち中将どまりが1名、他は少将どまりである。野村はこれらを抜

いて将官序列2位となり、小林と同時に大將進級を果たした。この点陸軍では陸大卒およびこれに準ずる砲工学校優等卒業、博士号所持等のキャリア組を除いた陸士卒のみの大將が鈴木孝雄の唯一例であった⁴⁾ことに比べると海軍の一特色といえる。また海大入学の遅速については27期中村良三が末次信正に1期遅れで同時、32期山本五十六が塩沢幸一・吉田善吾・嶋田繁太郎に1期遅れで将官序列2位に上っていること、33期豊田貞次郎が海大2期遅れで豊田副武をおさえ半年早く大將に進級していること、等によって全く影響がなかったことを示していると考えてよからう。

戦死進級が陸軍の7例に対し5例、陸軍に皆無の戦死後元帥府に列せられた2例のあること⁵⁾が目につく。

出身地都道府県は21地方にわたるが佐賀・東京各4人、鹿児島・広島・山口各3人が目につくといくであり、と

くに片寄りはない。この点陸軍大将66人は29地方で山口・石川各5人、岡山・鹿児島・大分・東京各4人、佐賀・福島・愛知・兵庫・宮城各3人となっていてほぼ同様な傾向を示しており、ともに地縁性を云々するほどでないと考えられる。

つぎに海兵・海大卒業成績を検討する。ともに最優秀の成績を残している者

小林躋造 海兵3番 海大優等（首席）

豊田貞次郎 海兵首席 海大優等

以上2名。これに準ずる者

豊田副武 海兵26番 海大優等

伊藤整一 海兵15番 海大優等

以上2名。つぎに海兵卒業時10番以内のトップグループであったが、海大では優等を逸した者百武三郎以下17名、これに非海大卒4名を加えれば21人が海兵優秀卒業成績をもって大将街道をつつ走ったことになり、巷間いわれる海大成績より海兵成績優先の原則の存在を窺わせる。

逆に海兵成績がトップグループでなかったのに、海大優等となった者に末次信正・野村直邦⁹⁾がいる。末次は海兵同期首席の中村良三と同時に大将進級を果たし、野村は短期間ながら東条内閣末期の海相として入閣した。海大優等が最後に物をいったのであろうか。

いっぽう海大、海兵とも普通の成績であった者に米内光政・及川古志郎・高須四郎⁷⁾が居る。いずれも軍令部総長・海相・連合艦隊司令長官・方面艦隊司令長官等をつとめた著名の人物であり、米内は一時期首相にもなった。

なお戦死後元帥府に列せられた山本五十六・古賀峰一はさておき現役大将として生存中の昭和18年6月21日元帥となった永野修身は海兵28期105人中2番。高知県出身、妻は陸軍少将岩谷竜太郎（秋田県出身）の女で格別閨閥に恵まれたわけでもないのに海相・総長・長官を歴任し海軍軍人の最高峰をきわめた。陸軍の杉山元と並ぶめづらしい例であろうか。

II

つぎに金鵄勲章所持について考察する。内分けは功1級7名、功2級9名、功3級6名、功4級5名であり、うち11名は再度以上授与されており、逆に無所持は11名である。しかし連合艦隊司令長官として殉職した古賀峰一を除き、功1級の米内光政・長谷川清・及川古志郎・南雲忠一・伊藤整一・山県正郷の6名が同期将官序列の1位でなかったこと、逆に序列1位であった永野修身・高橋三吉・百武源吾・豊田貞次郎・沢本頼雄が無所持で

氏 名	金鵄勲章	駐在武官
井 出 謙 治	功4・功3	ア メ リ カ
加 藤 寛 治	功4・功3	ロ シ ア
安 保 清 種	功4	イ ギ リ ス
百 武 三 郎	功4	ドイツ・オーストリア
谷 口 尚 真	功4	ア メ リ カ
山 本 英 輔	功4	ド イ ツ
大 角 岑 生		
山 梨 勝之進		
小 林 躋 造		アメリカ・イギリス
野 村 吉三郎	功2	オーストリア・ドイツ
中 村 良 三		
末 次 信 正		イ ギ リ ス
永 野 修 身		ア メ リ カ
高 橋 三 吉		
藤 田 尚 徳	功4	イ ギ リ ス
米 内 光 政	功4・功1	ロ シ ア
百 武 源 吾		ア メ リ カ
加 藤 隆 義	功3	フ ラ ン ス
長谷川 清	功4・功1	ア メ リ カ
及 川 古志郎	功1	
塩 沢 幸 一	功3・功2	イ ギ リ ス
山 本 五十六	功2	ア メ リ カ
吉 田 善 吾		
嶋 田 繁太郎	功3・功2	イ タ リ ア
豊 田 貞次郎		イ ギ リ ス
豊 田 副 武	功2	イ ギ リ ス
古 賀 峰 一	功2・功1	フ ラ ン ス
近 藤 信 竹	功2	ロシア・ドイツ
高 須 四 郎	功3・功2	イ ギ リ ス
野 村 直 邦	功3	ド イ ツ
沢 本 頼 雄		イ ギ リ ス
塚 原 二四三	功2	
南 雲 忠 一	功3・功1	
井 上 成 美	功3	ス イ ス
遠 藤 喜 一	功3	ド イ ツ
伊 藤 整 一	功4・功1	ア メ リ カ
山 県 正 郷	功4・功3・功1	イ ギ リ ス
高 木 武 雄	功2	

あること、何よりも生前元帥府に列せられた永野も無所持であることを思えば、金鵄勲章の有無は大将進級のための重要要件となっていないように推考されるところである。

さらに海軍高級軍人たるべく当局者も慮り、当人も望んだという外国駐在武官歴をかえりみる。29人が経験者

しかし大角岑生・山梨・中村・高橋・吉田善吾の5名が金鵄勲章を持たず、駐在武官歴もなかったことを並考すれば、海軍大将進級にこの二つが作用することなかったと結論づけてもあやまりでないといえる。

[illegible]

上表により少尉任官後大将に至る進級状況について考察する。陸海軍とも同期卒業生は大尉まで同時進級、以後は抜擢進級になるという。しかるに大尉進級時1年遅れた3例——大角岑生・米内光政・豊田副武——の存在が目につく。いずれものち名を残した人物だけに意外である。

少佐進級時1年遅れた2例——大角・米内——、4か月遅れ1例——豊田副武——。逆に1年早く1期上と同時進級した1例——塩沢幸——。

中佐進級時1年遅れ6例——及川古志郎・嶋田繁太郎・豊田副武・野村直邦・山県正郷・高木武雄——。

大佐進級時1年遅れ6例——安保清種・及川・嶋田・豊田副武・山県・高木——。逆に1年先んじた2例——近藤信竹・沢本頼雄——。

少将で1年遅れ4例——及川・豊田副武・山県・高木——。1年早い3例——塩沢・近藤・沢本——、このうち塩沢・沢本は1期上と同時進級である。

中將では1年遅れ2例——米内・及川——、半年遅れ2例——山県・高木。1年早い3例——塩沢・近藤・沢本——、塩沢・沢本は1期上と同時進級である。

大将では大部分が同時進級しているが、7か月遅れた及川の1例、1年早い3例——塩沢・近藤・沢本——があり、塩沢・沢本は1期上と同時である。

以上は海兵同期2人以上の場合であるが、同期1人大将の例で永野修身が中佐以後大将まで1期上と同時進級、百武源吾が少佐で1期上と同時、大佐以後もすべて同時進級。古賀峰一が大尉で1期上と同時進級を果したが、他はすべて1年乃至8か月の差がついた。また井上成美も大佐以後つねに1期上と同時進級している。

以上みられる進級の遅速はそれぞれの階級における人事考課によるところであろう。あるいはその他の要因も伏在したかと考えられるが今は詳らかにしえない。

IV

つぎに海軍将校人事の最大のポイントといわれる海兵卒業序列が香しくないにもかかわらず大将になった若干名について、当該期トップグループとの進級の過程をかえりみてみたい。

まず27期末次信正である。113名中50番で卒業(但し海大7期では優等首席)、首席は中村良三である。しかるに明治34年1月少尉任官以後昭和2年12月1日将官序列2位をもって大将に任じられるまで序列1位の中村と同年同月同日並んで進級しており、全く差がない。末次は明

治末期(少佐ころか)「戦艦の砲を艦の中心線に配置し、旋回させれば左右どちらにも撃てるという、『中心線砲装』というアイデアを考え出し、世界の砲術界を驚かせた」「優れたアイデアを提言した作戦家」(『日本海軍指揮官総覧』〈1995年新人物往来社〉129頁)と評されているが、この業績が物を云ったのであろうか。

つぎは29期米内光政。125人中68番、首席の高橋三吉に大尉で1年、少佐で1年、中將で1年遅れ、将官序列3位で大将になったときも1年遅れた。昭和10年12月横須賀鎮守府司令長官就任時「意外な人事と思われ」「エリートタイプではなかったが、現実的な判断力、類まれな指導力を持つ器量人」とみられて海相2度(同書169～170頁)、昭和15年「米内はむしろ私の方から推薦した(中略)米内：閣はよくやったと思ふ」(『昭和天皇独白録』〈1995年文春文庫〉57～58頁)と昭和天皇格別の信任のもと首相の印綬をも帯びた米内はまた功1級金鵄勲章の所持者でもあった。海兵成績を他所に力量が評価された例であらう。

つぎは31期及川古志郎。188人中76番。この期将官序列1位の加藤隆義は海兵では5番、首席の枝原百合一は将官序列4位で昭和7年12月1日上位の加藤・長谷川清・及川と中將に同時進級したが10年12月25日予備役となった。2番菊井信義は大正12年12月1日トップグループに1年遅れて大佐、昭和4年11月30日2年遅れて少将になったが、5年10月10日予備役。3番鈴木重音は将官名簿になく、4番寺島健は枝原と同年月大佐・少将・中將となり、昭和9年4月1日予備役となった。これらに対し及川は将官序列9位藤音唆と大佐・少将・中將まで同時であったが、結局彼らを抜いて大将になった。なお中佐以後中將まで加藤・長谷川に1年、大将に7か月遅れている。

つぎは3人の大将を出した35期の場合をみる。この期は首席の近藤以下173人中少将以上に昇った者30名。大将3人、中將どまり10人のうち9人までは高須・野村と同時進級、1人は1年遅れて中將になった。少将どまり17人中12名は高須・野村と同時少将になっている。残念なことにこの期の卒業序列は不明確であり、この視角からの詳考が不可能である。この期3人の大将についても将官序列1位でほとんど1期上と同時進級してきた近藤が『日本海軍指揮官総覧』に格別の論評なく経歴のみ5行で伝えられるにとどまったこと¹⁾、高須が政治的に無色であることから五・一五事件判士長に起用されたこと、野村が東条内閣末期不評の嶋田繁太郎に代って海相にな

ったこと、等をのぞいて格別伝えられるような逸話・人物評を残していないことが注意されるところである（同書該当頁参照）。

V

最後に大将を出した期で首席すなわち大将の場合を除いた期——16・24・25・26・28・29・31・32・34・36・37・39各期における首席卒業者をかえりみたい。

16期木山信吉は将官名簿9人中に見えない。

24期筑土次郎は将官序列6位、大正10年12月1日山本・大角らに1年遅れ少将となったが、大正13年2月予備役。

25期松岡静雄は将官12人中に見えぬ。

26期木原静輔も25名の将官中に見えない。

28期波多野貞夫は将官序列2位、中将まで永野と同時進級してきたが昭和7年3月予備役。

29期溝部洋六も将官19人中に居ない。

31期枝原百合一は前述したごとく大佐・少将・中将とも及川に1年先んじていたが、昭和10年12月予備役。

32期堀悌吉は将官序列5位、少将・中将まで1位の塩沢と並び、山本・吉田・嶋田に1年先んじていたが、昭和9年12月予備役。堀は海兵在学中「『創立以来、未だ見ざる秀才』といわれ、クラスメートからも『神さまの傑作のひとつ堀の頭脳』と賞賛されるほど（中略）クラス全員が衆目一致し、その大成を認めていたくらい抜群の才能を持っていた」。その堀が「中将昇進後に閑職にまわされ、やがて海軍を予備役に編入された」のはワシントン・ロンドン両軍縮会議で条約のとりまとめに奔走したため、反対派いわゆる艦隊派の恨みを買ったため、といわれている（『日本海軍指揮官総覧』158頁）。本来大将たるべき人材が落された特殊の例であったろうが、逆にいえば大将進級にかなりの運不運がつきまとったことを示す典型であったと思われる。

34期佐古良一、将官29人中に見えぬ。

36期佐藤市郎は将官序列3位、海大優等でフランス駐在の経歴あり、大佐・少将・中将まで1位の沢本と同時進級、2位塚原に1年早くすすんだが、昭和15年4月予備役となった。

37期小林万一郎、将官49人中に見えぬ。

39期多賀高秀、将官49人中に見えない。

以上のごとく大将を出した期で首席すなわち大将をのぞいた12期分の首席卒業者12人をみるに、少将進級以前何らかの理由で消えた者7人、少将で終った者1人。い

っぱう将官序列上位で中将まで昇ったが、ここでとまった者4人となる。すなわち12期にわたる首席卒業生中4人がトップグループを進んだが、けっきょくは同期下位卒業生に大将をさらわれたのである。

巷間海軍将校においては海兵卒業成績いわゆるハンモックナンバーが出世にもっとも重く関係し最後までこれがついてまわるといわれたが、事実は首席即大将は18期にわたる38人中6例のみ、16%の確率にとどまった。逆に84%は海兵成績ならぬ実績・力量によって海軍大将に昇ったというべきである。

むすび

以上の考察によってつぎのことが結論づけられるであろう。

海兵16期より39期に至る24期間に誕生した海軍大将38名について

- ① 海大卒業の学歴を持たぬ者4名居り
- ② 海大入学の遅速は問題にならず
- ③ 出身地は東京・佐賀各4人、鹿児島・山口・広島各3人を含め21都道府県にわたるが格別影響があったとは考えられず
- ④ 海兵首席卒業6名を含め23名が10番以内。しかしうち19名が海大成績非優等であることから海大より海兵卒業成績重視の巷間の説が裏付けられる。
- ⑤ しかし海兵成績が普通程度であった者5名¹²⁾いて、海相・軍令部総長・連合艦隊司令長官の経験者が含まれていることに注意すべきである。
- ⑥ 金鵄勲章所持は功1級から功4級にわたり27名であるが、無所持者中に生前元帥府に列せられた永野修身が含まれていることは逸せられない。
- ⑦ 駐在武官経験者は29名。しかし無経験で将官序列1位の大将となった者3名（いずれも海兵5番以内）いること、また勲章無所持・武官歴もない5名が含まれていることからこの二つは大将たるべき必須資格でなかったと推考される。
- ⑧ 元帥府に列せられた者生前1名、死後2名。

等、の諸点が指摘される。

いっぽう海兵首席すなわち大将となった期および同期で複数以上の大将を出した期を除いた12期にわたる海兵首席卒業生中8人が中途脱落、4名はトップグループで中将まで進んだが結局は同期下位卒業者が大将を射止めている事実から巷間いふところの海兵卒業成績乃至序列は絶対に非ず、卒業後の力量・実績が海軍大将たるべく

もっとも力あったと考えるべきであろう。

註

- 1) 4) 小論「『陸軍大将』誕生の条件」(『政治経済史学』329〈平成5年〉)。
- 2) 3) ただし35期野村の卒業序列については、つぎの高須を含めて資料上若干の不備がある。この点後考が必要であることを特記して置く。
- 5) 天皇の軍事上の最高顧問機関として明治31年設置された元帥府は大将のうち特に功績のあった者を列せしめた。皇族をのぞいて陸軍では14名、海軍では加藤友三郎・山本五十六・古賀峰一の死後奏請を含めて10名。なお最後の陸軍省人事局長額田担によれば「陸軍では、元帥の本質上、死後に奏請されたことは絶対になかった」(『陸軍省人事局長の回想』225～226頁〈昭和52年芙蓉書房〉)とするところである。
- 6) 7) 野村・高須の海兵卒業成績については後考が必要である。
- 8) 9) 10) 原簿通りである。思うに海軍では明治19年からの一時期中尉・中佐の官階を廃止したことがあり、それに伴うものであったろう。なお明治30年もとに戻し中尉・中佐を復活させた(熊谷直『日本の軍隊もの

しり物語』48頁、平成7年光人社)。

- 11) ちなみに『日本海軍指揮官総覧』該当頁の全文は以下のごとくである。

近藤信竹・海軍大将・大阪府出身・1886～1953

海兵35期。昭和16年9月、第2艦隊司令長官。開戦とともに南方部隊総指揮官としてマレー半島上陸作戦、ジャワ島攻略作戦を支援、マレー海戦では英東洋艦隊を撃滅した。17年2月、南雲機動部隊を指揮してインド洋作戦を実施、制海権を握った。18年軍事参議官。

- 12) ただし3名になる可能性がある。

(附記)①本論の表作成にあたり主として下記を参考として用いた。

日本近代史料研究会『日本陸海軍の制度・組織・人事』(昭和46年東大出版会)

外山操(編)『陸海軍将官人事総覧(海軍篇)』(昭和56年芙蓉書房)

『国史大辞典』(吉川弘文館)

②本論使用の資料については防衛研究所戦史部菊田慎典主任研究官より格別の御教示をいただいた。特記して御礼申し上げる。

(平成9・8・1)